資料１

第2回有識者会議のまとめ

前半の議論（場のあり方について）のまとめ

・集約されたインフラストラクチャを使いながら、そこでの活動をいかに外縁に広げていくことができるのかが大きなポイントである

・文化情報資源を扱う機関（図書館、公文書館、博物館等）を組織的に統合することは必ずしも賢明ではないが、連携していくことによる面白さをつくること、シンボル性のあるひとまとまりのエリアをつくることには意味がある

・単なる集合体を超えるためには、そこに集まったものを共通の目標にまとめあげつつ、それぞれの持ち味や強みを連携させていくことが重要ではないか

・各機能（図書館、公文書館、博物館等）の専門性を担保しつつ、機能が重なり合う部分から新しい使い方の可能性を見出すべきではないか

・複合化によって生まれる新しい使い方、潜在的な可能性を引き出すには、利用者にそれを発見してもらうだけでなく、そこに気付きをもたらす仕組みを用意することがより望ましいのではないか

・利用者（県民）が情報を探しに来るインターフェイス（窓口）は、共通のプラットフォームの上で一本化するのがよいのではないか

・県と市町村が役割分担していく上で、プラットフォームをどう市町村に使ってもらえるような環境にしていくのかを考えなければいけない

・収蔵庫や設備などのバックヤードのあり方は大きな課題になる

後半の議論（コンテンツのあり方について）のまとめ

・県立図書館のコレクションの面白さ（知る人ぞ知る資料の存在）を知らせるための仕組み（プラットフォーム）と、その見つけやすさが重要

・デジタルを軸にすることで、さまざまな機関や主体が持っている資料を一元的に探すことができるようになる

・どの機関が何の資料を収集するのかという方針を明確にし、一元的なプラットフォームに、関係する資料すべてが集まってくるような仕組みを考えていくのがよいのではないか

・千葉県にとって大切な領域、重点領域は何なのか、そこでどんなことを行うのかという議論をする必要がある

・恒常的な重点領域を持つ一方で、利用者のニーズやそこで行われるさまざまな活動に応じて蔵書やノウハウを構築していくこともひとつの方法ではないか

・地域情報を残していくためには、できるだけ広く、さまざまなレベルのものを可能な限り集めていくほうがよい

・地域資料の収集、デジタル資料の収集は役割分担が必要（国－県－市町村）

・資料が探せて、活用できるためには専門家集団が必要

・コンテンツを発信するだけでなく、それを見つけたり活用するリテラシーを利用者が身につけられるような取組みが必要ではないか